

第50回日本臨床衛生検査技師会 中四国支部医学検査学会

「中高生向け進学支援事業」 「学生フォーラム」 参加報告

和田 晋一*§ 太田 安彦* 奥田 潤*

はじめに

第50回日本臨床衛生検査技師会中四国支部医学検査学会が「臨床検査 未来への躍進 ～50年の時間を重ねて～」をテーマに平成29年11月11日(土)、12日(日)の2日間、海峽メッセ下関、下関市生涯学習プラザにて開催された。その企画として「中高生向け進学支援事業」が11日(土)の午後と12日(日)の午前の2回、「学生フォーラム」が12日(日)の午後から開催された。

I. 中高生向け進学支援事業

「中高生向け進学支援事業」は日本臨床衛生検査技師会が主催し、これから臨床検査技師の道へ進もうとする中高生向けの進路説明会である。まず、山口県臨床検査技師会参与である川元博之氏から臨床検査技師としての仕事の概要が説明された。初めて聞く言葉もたくさんあっただろうが、学生・保護者とも真剣に聞き入っていた。その後、中国・四国近郊に位置する9校の養成学校による学生・保護者向けの学校紹介が行われた。今回参加した養成学校は岡山理科大学、岡山大学、川崎医療福祉大学、広島国際大学、山陽女子短期大学、倉敷芸術科学大学、美萩野臨床医学専門学校、高知学園短期大学と筆者の香川県立保健医療大学であった。各校の担当者は地域性、利便性、科目、学部・学科創設の歴史、就学期間、受け入れ人数、

国家試験合格率など大学・学科の特徴を紹介した。さらに卒業後の進路状況についても進学、就職などの魅力をアピールした。

その後、「実際の検査の仕事を体験してみよう」の企画が行われた。これは現場で活躍されている臨床検査技師の指導のもと模擬採血、心電図、超音波(心臓、腹部)検査、顕微鏡画像の観察を体験するコーナーである。学生たちはグループに分かれ、少し大きめの白衣に身を包み参加した。ある学生は震える手で注射器を握り、採血練習用シミュレータの血管に真剣なまなざしで針を刺していた。また、心電図、超音波(心臓、腹部)コーナーではボランティアの体に電極を装着したり、プローブをあて、映し出される波形、画像に驚きの声を上げながら観察していた(写真1)。顕微鏡コーナーでは本物の病理組織像をディスカッション顕微鏡で供覧しながら説明に耳を傾けていた(写真2)。学生たちにとって模擬体験は「自分はどうのような仕事に就きたいのか」「どのような仕事に向いているのか」を考えるよい機会になったと思えた。また、その様子を不安げに見守る父兄たちにも子供の将来像が想像できただろう。

II. 学生フォーラム

12日(日)の午後からは学生フォーラムが開催された。これから臨床検査技師として、また社会人として羽ばたこうとする養成学校学生代表者9

*香川県立保健医療大学 保健医療学部 臨床検査学科

§wada-s@chs.pref.kagawa.jp

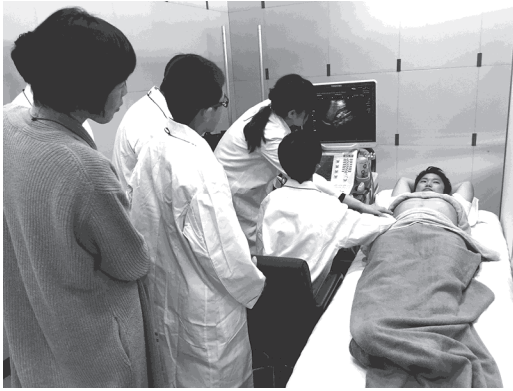


写真1 超音波検査を体験する中高生たち

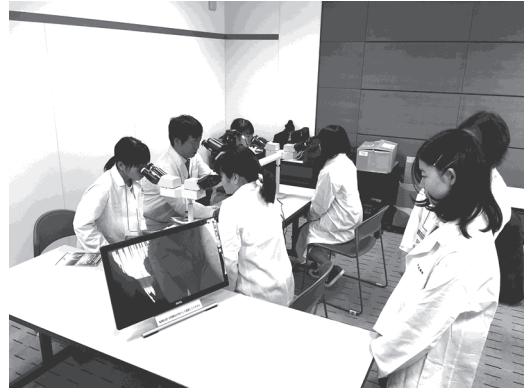


写真2 顕微鏡をのぞき込む中高生たち



写真3 学生フォーラムでの討論の様子

名(岡山大学、岡山理科大学、山陽女子短期大学、広島国際大学、山口大学、川崎医療福祉大学、高知学園短期大学、山口大学大学院、倉敷芸術科学大学)と山口大学医学部附属病院検査部技師長である水野秀一氏による発表討論会である。会場には教員の他、臨地実習を担当している臨床検査技師の姿も見られた。学生たちは「自校の特徴と目指す臨床検査技師像」のテーマで発表した(写真3)。どの学生も自校の特徴を生かし、これから臨床検査技師としてより豊かな充実した人生を描いていることがわかった。努力を惜しまず臨床検査技師としての将来のビジョンが明確に描かれていることに非常に感銘を受けた。例えば、国際貢献を視野に留学を希望する学生や卒業までに臨床工学技士や細胞検査士と言ったダブルライセンスの取得を目指す学生、超音波検査士を目指し、今

から症例を集めている学生など漠然とした臨床検査技師像ではなく、具体的にどのような臨床検査技師になろうとしているのか、非常に明確化していた。また、ある学生は大学生活に行き詰まり退学を考えてたが、胚培養士と言う新たな方向性を教員から提案され、現在胚培養士に向け勉強を続けている。このように人生をも変えてしまう教員の役割の大きさに責任の重さを実感した。

臨床の現場からは水野秀一氏が「現場が求める臨床検査技師像」のタイトルで講演された。水野氏は「現場が求める技師と自分が思い描く技師とのギャップにモチベーションが保てず離職するケースがある。自分が目標とする技師像をしっかりと見極めることが重要である」また「診療では幅広く深い思考力で検査結果を読み取り病態を把握する能力や高度な専門技術と知識、教育では次世

代を担う技師の育成、研究では新しい検査法の開発などが求められている」と必要とされる技師像を語られた。現実の社会の厳しさにハッとした学生もいたのではないだろうか。総合討論では他の教員から「臨地実習の最適な期間は?」「臨床と研究の両立は可能か?」「現場に必要なスキルは?」などの質問がでたが、どの学生も積極的に自分の意見を述べていたのが印象的であった。日本臨床衛生検査技師会会長である宮島喜文氏も議論に参加され、臨床に求められる技師として「知識」「技術」もさることながら「人間性」も重要であると強調された。

最 後 に

臨床検査は日常診療に欠かせない部門であり、その検査を担う臨床検査技師は必要不可欠な職種と言える。しかし、その認知度は医師、看護師、薬剤師などに比べ低いように思う。中高生が病院で検査を受け臨床検査技師に関わっていてもどの職種なのかがわからないことが多い。今回のような地域における「中高生向け進学支援事業」を行うことによって早い段階で臨床検査技師と言う職

を知ることで、病院や診療施設で身近に感じることができないのではないだろうか。早い時期から学生達のなりたい職業の選択肢に加えてもらうことが、今後の臨床検査を支える優秀な人材確保につながると思われた。

「学生フォーラム」では学生、教員、臨床現場がどのような考えのもとに臨床検査をとらえているのかがわかった。今後、臨床検査の発展には学生、教員、臨床現場がお互いに情報を共有し刺激しあい共鳴していくことが重要であり、それが診療のレベルアップ、人材の育成、研究の発展につながると思われた。これからの臨床検査技師は病院の検査室のコアにとどまらず、検査前は外来、病棟に向いて直接患者の採血等の検体採取を行い、また、検査後は検査データの説明など積極的に外部へ出向くことが求められる。さらに高齢化に伴い地域包括医療のもと、チームスタッフとして病院から出て在宅医療にも関わっていくことは必至である。その時、いかに「人間性」と言うコミュニケーションツールが臨床検査技師の将来を左右すると言っても過言ではないだろう。